

令和2年度学校経営計画 年度末評価



広島県立神辺旭高等学校

令和2年度自己評価シート（年度末評価）

校番	64	学校名	広島県立神辺旭高等学校	校長氏名	藤木 史朗	全日制	本校
----	----	-----	-------------	------	-------	-----	----

学校経営目標								
達成目標	評価指標		前年度	本年度		評価	理由	担当部等
			実績値	目標値	実績値			
(1) 高い志を持ち確かな学力を身につけ、進路実現ができる学校。								
授業の質を高め、教科指導力を向上させる。	相互授業観察の実施率	教科内授業観察2回	86%	90%	71%	C	前期84%、後期58%で、後期が下がり、全体でも未達であった。	教務部 進路指導部 各教科
	進研1月模試の3教科(国語・数学・英語)総合偏差値50以上の生徒数	1年	33	35	28	C	目標値に到達できなかった。	
		2年	34	35	20	C	目標値に到達できなかった。	
	3年進研9月マーク模試(5-8文系、5-7理系)偏差値50以上の生徒数		12	15	10	B	5-8文型が7名、5-7理型が3名であった。	
「課題発見・解決学習」を取り入れた主体的な学びを促す授業づくりを行う。	「主体的な学び」に関するアンケート項目で肯定的評価をした生徒の割合		89%	90%	74.7%	B	1年-69.1%、2年-69.0%、3年-86.2%校内で「主体的な学び」について意識統一が充分なされていないため。	教育情報部 教務部 各教科
ICTを活用し、これからの社会を生き抜くことのできる資質・能力を育成する。	生徒用1人1台のパソコンを活用した授業を週1回以上行った学年教科担当教員の割合		新規	70% (1学年)	48%	C	職員全員への貸し出しが1月から始まり、機器に慣れていない職員が多数いたため。	教育情報部 教務部 各教科
	アンケートで、生徒用パソコンを活用することで情報を吟味し考え深めて表現できるようになった生徒の割合		新規	60%	95%	A	生徒は機器の使用にも慣れ、ICTを用いての授業理解が進んだため。	
高い目標を掲げさせ、進路希望を実現する。	国公立大学合格者数		26	35	36	A	目標値に到達した。	進路指導部
	難関大、広島・岡山大学合格者数		2	4	3	B	ほぼ目標値に到達した。	

【評価結果の分析】

●教務部

- ・主体的な学び・・・コンピテンシーの一つである「主体性な学び」を育成することについて、校内で足並みがそろっていない面があると考えられる。
- ・相互授業観察・・・教育研究テーマに沿って授業研究を進めていく雰囲気を作ることが不十分であったこと、ICTの活用に熟練していく教員とそうでない教員の2極化が進んだこと、などが考えられる。
- ・生徒用1人台のパソコンを活用した授業を実践した1学年教科担当教員の割合・・・iPadを手元に持っていないことから、ICTの活用に熟練していく教員とそうでない教員の2極化が進んだことによる。
- ・生徒用パソコンの活用により情報を吟味し考えを深められる生徒の割合・・・1学年担当の約半数の教員が週1回以上iPadを活用することで、生徒は使用法にも習熟し、それを用いた授業にも慣れ、情報を有効利用することにも慣れていったと考えられる。

●教育情報部

- ・各アプリの使用方法等の研修会を実施してきたが、教員用一人一台iPadの配備が1月末からとなったことが使用率の低さの原因であると考えられる。

●進路指導部

- ・科目に焦点を当てると、英語、国語は伸びてきていたが、数学ⅠAの伸びがなかった。例年と比較すると、各教科とも昨年並みの結果となっている。新学年が始まり、2ヶ月の休業期間の間、リモートによる課題の提供や、アプリによる自習のすすめなど取り組んだが、結果的に数学などは単元を終えることで9月までかかり、例年復習の意味も含め行ってきた夏季補習をすることなく9月模試を迎えたことが、結果に反映していると考えられる。さらに理科、地歴・公民などは、休業の影響で、模試までの授業時間が少なく、希望者による放課後補習で補おうとしたが、全体の底上げにはなっていないこともこの結果に反映していると考ええる。

【今後の改善方策】

●教務部

- ・主体的な学び・・・校内研修などを通して、「主体的な学び」について深めていく。
- ・相互授業観察・・・iPad はほぼ全教職員に貸し出され、常に手元にある。教員がiPad をいつでも使えること、来年度全校生徒の2/3がiPad を授業で使用するために持っている、今後iPad を校内の教育活動の多くの場面で使用する割合が増えていく、等の要因により、個人及び教科内での授業での活用の議論が進んでいくことで、授業観察が特別なものでなく、日常的なものとなっていくと考える。また校内での研究を促進するパイロット的存在も必要である。
- ・生徒用1人台のパソコンを活用した授業を実践した1学年教科担当教員の割合・・・iPad はほぼ全教職員に貸し出され、常に教員の手元にある。教員がiPad をいつでも使えること、来年度全校生徒の2/3がiPad を授業で使用するために持っている、今後iPad を校内の教育活動の多くの場面で使用する割合が増えていく、等の事柄により、今後割合は増加するものと考えられる。
- ・生徒用パソコンの活用により情報を吟味し考えを深められる生徒の割合・・・iPad を使用する教員が今後、増加していくことが考えられることから、より深まっていくと考えられる。

●教育情報部

- ・個人所有端末や貸出用端末を活用していた教員と1月から端末を持ち始めた教員とのギャップを埋めていくことが重要である。教科内での活用方法の統一など、個人的な活用からより組織的な活用にシフトしていくための情報提供が必要である。

●進路指導部

- ・今年度は英語、国語の授業時間を使って大学入学共通テストの演習などを行うことで、休業期間の空白を補おうとした。今後は、授業時間の確保を例年通り行われることが前提とはなるが、継続して復習が必要な数学や、ある程度の演習の量が必要な英語を中心に、放課後補習や、長期休業中の補習やスタディサプリの活用などを行うことで、学習内容の定着を図り、目標に近づくようにしたい。

(2)「旭三訓」を実践し、地域や国際社会との関わりの中で、たくましさを練り、豊かな心を育てる学校。

海外研修旅行・姉妹校交流を通して生徒の満足度を高め、国際理解と異文化理解を深める生徒を育成する。	アンケートの「授業や特別活動の中で、英語を使って、自分の意見を効果的に他者に伝えることができた」について、肯定的評価をした生徒の割合		新規	80%	64%	C	台湾研修旅行・姉妹校交流が今年度中止となった影響による。	2学年 英語科 総務部
	アンケートの「姉妹校についての理解が深まった」について、肯定的評価をした生徒の割合		77%	80%	38%	—	交流を計画中。	
「旭三訓」の実践に積極的に取り組む生徒を育成する。	アンケートの「旭三訓ルーブリック」の清掃徹底に関する項目で、標準、発展レベルが達成できたと答えた生徒の割合	標準	78%	85%	77%	B	時間いっぱい清掃箇所を探し他の人を手伝うことができています。	生徒指導部
		発展	56%	70%	52%	C	良い清掃について話し合うことができていない。	
	アンケートの「旭三訓ルーブリック」の挨拶励行に関する項目で、標準、発展レベルが達成できたと答えた生徒の割合	標準	91%	95%	92%	B	地域の方にも自分からできている。	
		発展	72%	75%	74%	B	場面に応じてできている。	

【評価結果の分析】

●総務部

- ・新型コロナウイルス感染症の影響から台湾研修旅行・姉妹校交流が今年度中止となり、予定されていた交流が無くなったため肯定評価が例年より低くなったと考える。

●生徒指導部

- ・「旭三訓」に係る肯定的な自己評価は全生徒の90%超（三つの分野のそれぞれの総合評価において）となっており、生徒には概ね励行できているという自覚が見られる。

【今後の改善方策】

●総務部

- ・姉妹校とのレター交換（2年普通科）を年度内に計画中である。新型コロナウイルス感染症の影響が今後も続くことが考えられるため、交流の仕方を見直す必要がある。

●生徒指導部

- ・挨拶励行について、校内では概ねできているが、校外では挨拶ができていないという指摘がある。いつ、どのような場面でも気持ちの良い挨拶ができる生徒を育成すべく、分け隔てのない挨拶の大切さを自覚させたい。
- ・清掃励行について、掃除時間中は概ねできているが、その他の時間における美化意識に欠ける面が見られる。平素からごみを出さず公共の場をきれいに保つ心がけを育みたい。

(3) 学力と競技力を向上させ、一人一人が心を輝かすことができる学校。

学習習慣を確立し、主体的に学習させる。	授業以外の学習時間（家庭・塾・民間のオンライン学習等）を確保する。	3年	普通科 体育科	新規	220分 70分	237分 42分	A	普通科は目標を完全に達成した。体育科は目標値より少ないが前期（38分）に比べて増えている。	進路指導部 教務部 各学年
		2年	普通科 体育科	新規	180分 60分	152分 49分	C	主体的に学習する習慣を身に付けさせることができていない。	
		1年	普通科 体育科	新規	150分 50分	121分 41分	C	普通科、体育科ともに学習習慣が定着しない生徒が多かった。	
技術力や競技力を備え、リーダーシップを発揮できる体育科生徒を育成する。	強化クラブの全国大会出場クラブ数及び人数	クラブ数		6	6	—	—	新型コロナウイルス感染症により大会未実施	体育科
		人数		60人	65人	—	—	新型コロナウイルス感染症により大会未実施	
	新体力テストの全項目において、全国平均を上回る（A評価の）体育科生徒の割合			全国平均 95%	全国平均 96%	—	—	新型コロナウイルス感染症により未実施	
			A評価 85%	A評価 90%	—	—	新型コロナウイルス感染症により未実施		

【評価結果の分析】

●3学年

・大学入学共通テストに向けて学習時間が大幅に増えたと考えられる。体育科については受験直前の10月は1日平均70分と目標を概ね達成しているが、受験が終わってから学習時間が減少した。

●2学年

・進路実現に向けて主体的に学習しようとする生徒がまだ少なく、何のために学習するのかということが生徒に理解できていない。

●1学年

・生徒に学習習慣の定着を図る集中的な指導の時機を逸したため、生徒が学習時間と教科バランスを十分に確保・考慮できなかった。

●体育科

・新型コロナウイルス感染症感染対策によりすべての部活動において大会が中止または延期となった。（一部代替大会の開催があったものの評価は難しい。）また今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止という視点に立った時、中学校・高等学校との連携は相互に迷惑・負担をかけるということで難しい状況となった。しばらくは緊急事態宣言の解除等今後の見通しが立たない中ではあるが、次年度に向けて校内で課題解決に向けて練習やトレーニング等の準備を進めていくしかないと考えている。

・4月より全体集会等が実施できない状況で、生徒に対し様々な場面での対処方法等考えるという視点に立った講和が実施できなかった。今しばらくは個人指導等で生徒の意識低下を防いでいくのが最適と考えている。

・新体力テストについて今年度は未実施ということでデータはないものの、例年と現状維持か多少の低下という結果になるものと予想している。（生徒同士の接触等を避けなければならない状況の中での体力向上は、体育の時間における準備運動という限られた時間の中では非常に難しかった。）

・今年度は、ICT活用の推進にあわせ、コロナ禍での自宅待機でも体を動かせるよう、体操の動画を配信するなど、体育科でもICT活用を推進することで、生徒が体を動かす機会を確保できた。

【今後の改善方策】

●3学年

・早い時期に進路決定した生徒に対して、進路に向けた学習の意義や方法について指導をしていくことが必要である。

●2学年

・学習会や模擬試験の振り返りなどを通して、生徒の学習への意欲や主体性を向上させていく。

●1学年

・仮に臨時休業などがあっても学年のスタート時期にあわせ、高校生としての学習習慣を改めて徹底指導し、学習時間の確保と教科バランスの取れた学習を意識づける。

●体育科

・今後の社会の動向を見定める中で、残りの期間を利用して次年度への対策を検討していきたい。

・学校生活全般においてコロナ禍における基本的な生活習慣の見直しを図り、神辺旭高校生・体育科生徒としての自覚と責任を持たせるような様々な場面（授業・課外活動・学校行事等）を利用して指導していきたい。今年度は新型コロナウイルス感染症感染対策に追われ、なかなか具体的な取り組みに至っていないのが現状であり、今後の状況を重視し、本校教職員間の連携と多くの教職員による指導体制を強化していきたい。

・コロナ禍の状況により、部活動等の制限が大幅に増加し週1回の部活動休養日と併せて、大きく日々の練習時間の

短縮をした。今後においても新型コロナウイルス感染症等との新しい生活様式に即した体制の中で、部活動の在り方を考えていかなければならない時と考えている。また『働き方改革』を視野に部活動の在り方を検討し、本校の強化クラブという位置づけの中で、地域の中学校との連携や選手の獲得をしていく必要がある。今後も与えられた環境の中で、本校での活動を求めてくる生徒に対し、指導方法や指導内容等を工夫するとともに自覚と責任ある生徒の育成に努め、最大限の努力を積み重ねていくつもりである。

・新体力テストの全項目において全国平均を上回することは体育科生徒として必然であり、来年度に向けて必ず達成できるように普通の授業・部活動の取り組みを検討・徹底していきたい。

(4) 教職員の働き方改革を推進し教職員の人間性や創造力を高め、効果的な教育活動を行うことができる学校。

教職員の業務改善を進めることにより、生徒と向き合う時間を確保する。	子供と向き合う時間が確保されていると感じる教員(管理職を除く。)の割合	新規	80%	71.1%	B	働き方改革を積極的に推進する中で、これまで以上に子どもと向き合う時間を確保できているが、目標まで到達できなかった。	管理職 各学科 各部 各学年 各教科 事務部
	ICTの活用や教材の共有等により、業務を効率的に実施できていると感じる教員(管理職を除く)の割合	新規	60%	73.8%	A	ICTの積極活用等により、業務効率化を推進した結果、効率化を実感できる教職員が目標値を超えた。	

【評価結果の分析】

●管理職

・働き方改革に向け、ICTの積極的な導入や活用を推進し、ハード面の整備(教職員1人1タブレット・各ホームルーム担任へのパソコン貸与等)やソフト面の構築(教育情報部等による活用方法構築とマニュアル作成及び配布、使い方の研修等年間を通じて10回以上実施)を行ってきた。その結果、教職員間でのタブレット上で作成した教材の共有、教職員と生徒間でアプリケーション上の課題配布と提出による時間や場所の制約を超えた指導方法拡大、「スタディサプリ」導入による基礎・基本指導の効率化等、教職員が生徒と向き合う時間を新たに創出できたものとする。

【今後の改善方策】

●管理職

・教職員の中には、パソコンやタブレットの使い方に不安を感じている者もいることから、その不安を解消し、指導方法や教材がより共有しやすい環境を整備していく必要がある。具体的には、各教職員の活用例を具体的な場面に応じて紹介する研修会実施や冊子配布を高い頻度で行うことにより、「どう使うのか」「うまくいくのか」といった教職員の不安感を解消する努力を行っていく必要がある。また、その運用にあたっては、情報機器やアプリケーションの効果的な使い方については教育情報部が、それを授業場面でどう使い評価にどう用いるか等授業実践に係ることは教務部が、それぞれプランを持ち寄り、分掌間で方針を一本化した上での組みを促して、より中身の充実したものにする必要がある。

令和2年度自己評価シート(年度末評価まとめ)

校番	64	学校名	広島県立神辺旭高等学校	校長氏名	藤木 史朗	全日制	本校
----	----	-----	-------------	------	-------	-----	----

1 評価結果の分析

(1) 成果

・今年度は年度当初から新型コロナウイルス感染症予防のための臨時休業が約2ヶ月間続き、生徒を集団として指導し本校生徒としての自覚を高める時期に、学校で生徒と対面しながら直接指導を行えない状況にあった。更に、校内・校外における様々な行事・大会の延期や中止により、生徒が自己の目標を達成することによる自己肯定感の向上の機会も得られない状況にあった。その中で、学校長のリーダーシップの下、教職員が結束してこの状況下で生徒のためにできることは何かを模索し、学校経営計画達成のために行動できたことは、教職員の帰属意識の高揚の点で大きな成果であった。

・今年度は1学年全員がタブレットを持ち、授業だけでなくホームルームにおける連絡・指示・意見交換等に活用する機会を用意した。具体的には、学習目標や内容の提示、学習課題の配付と提出、グループ学習における思考の共有、タブレット間を繋いだ意見表明等、様々な場面でタブレットを活用した。その結果、「パソコンを活用することで情報を吟味し考え深めて表現」する力を高めることができた生徒は95%に達しておりタブレット導入の成果が表れている。

・「学習習慣を確立し、主体的に学習させる」ことを目標に、家庭だけでなく「すきま時間」を活用した学習を全学年で促した結果、各学年の1日平均の学習時間は、1学年121分、2学年152分、3学年237分となり、家庭学習時間の目安と言われる「学年+1時間」に近い数値となった。特に3学年については、コロナ禍における受験で生徒が不利益を被らないよう、学年全体で学習時間の確保を徹底した結果、目標の220分を上回ることができた。

・「旭三訓」の実践については、目標値には届かなかったものの、挨拶の点でその重要性を学年・ホームルーム・部活動等で指導し続けた結果、標準・発展レベルが達成できたとする生徒が、標準レベルについては昨年度91%に対して今年度は92%と増加し、発展レベルについては昨年度72%に対して今年度は74%と増加した。

・ICTの積極的な導入を、年間を通じて継続した結果、その活用によって「業務を効率的に実施できていると感じる教員」が73.8%であった。

(2) 課題

・「『旭三訓』ルーブリックによる自己評価」において肯定的評価(O+△の合計値)については、前年度比上昇が27項目中14項目(51.9%)であるが、真の肯定的評価(Oのみ)については、前年度比上昇が27項目中2項目(7.4%)であった。このことから、「旭三訓」に係る項目について、行動に対する自覚と自負を持って行動できている生徒が減少傾向にあることがわかる。各項目に共通する課題は、「他者意識」である。「他者が待っているから急ごう」「他者が不快になるから周りをきれいにしよう」「他者がまだがんばっているから自分も手伝おう」等、自分が他者を意識することでより快適な社会生活が営める要素を失いつつある。これらの原因は、年度が変わり、他者と新たな人間関係を組み立て始める4月から5月が「新型コロナウイルス感染症」の影響で臨時休業となり、更に協働によって作り上げる各行事も軒並み中止となることで、「他者意識」を醸成する場を失ったことが影響している。コロナ禍の収束が見込める場合、集団づくりや各行事を通した「他者意識」の醸成が来年度の喫緊の課題となる。

・「令和2年度コンピテンシー活用自己評価」において、「コミュニケーション能力」や「貢献」、「チームの構築・維持」といった「他者意識」に係る項目が1年次から2年次への進行時に減少している。これは、「他者意識」が重要であるという各学年の初期指導が更に必要であることを意味していると考えられる。この点については、「旭三訓」ルーブリック評価と同じである。

・「令和2年度授業評価」において、「この授業では、ICTを活用した授業を実施されている」について、他の項目が軒並み3.2以上(最大4)であるのに比して、2.79と低調であった。この結果は「生徒用1人1台のパソコンを活用した授業を週1回以上行った学年教科担当教員の割合」が48%(目標値70%)と低調であったことと関連している。生徒がICTを用いることを積極的に求め、教職員に更なる活用を求めている結果であるとされる。

2 今後の改善方策

・学習成績において、基礎・基本の不十分な生徒が増えてきていることに対して、対策を考えていく必要がある。特に1年次に、予習・復習を中心とした学習習慣及び学習の教科バランスを意識した学習習慣を確立させ継続させる必要がある。そのために次のような取り組みを行う。

- ① 入学当初の4月から5月の時期に各教科で学び直しを意識した取組を行い、基礎的な学力を確かなものにししながら、自ら計画を立て、実行する主体的な学習を進める姿勢を育てる。
- ② ICT機器を用いた指導(スタディサプリの活用等)や習熟度別指導を効果的に運用しながら、基礎的な学習内容を定着させるとともに、教職員にもICTの活用について、活用方法の統一など、個人的な活用からより組織的な活用にシフトしていくための情報共有を行う。
- ③ 担任を中心としたきめ細やかな面談指導によって、生徒の学習状況等を把握しながら、適切な指導・助言をタイムリーに行う。個人面談をする際には、スタディ・サポートや模擬試験のデータの分析に基づいて学年会等で指導の在り方を検証し、適切な方針を持って行う。

・旭三訓をより充実させるために、全校朝礼や学校行事の場で、「旭の伝統」として生徒に伝えていく。また、学校行事や部活動などで得た達成感・自己肯定感を、主体的に行動する原動力に変換できるよう、「やらされる」行動から、自主的に「やる」行動となるような働きかけをする。

・部活動では、与えられた環境の中で、本校での活動を求めてくる生徒に対し、指導方法や指導内容等を工夫するとともに自覚と責任ある生徒の育成に努め、最大限の努力を積み重ねていく。

3 学校関係者評価結果を踏まえた今後の改善方策(学校関係者評価実施後に記入する。)

・学校長の下で、教職員がどんな学校にしたいのか、地域から何を期待されているのかを再確認し共有していく。

令和2年度学校関係者評価シート(年度末評価)

令和3年2月16日

校番	64	学校名	広島県立神辺旭高等学校	校長氏名	藤木 史朗	全日制	全日制	本校	本校
評価項目	評価	理由・意見							
目標、指標、計画等の設定の適切さ	B	<p>概ね適切であると思われる。ただし、次の点には留意すべきである。</p> <p>「授業の質の向上」と「進路希望の実現」について、それぞれ生徒実態を判断した上で指標や目標が設定されたと思うが、これらの実績は、入学時の生徒の学力層に大きく左右される。したがって、現状では右肩上がりの目標設定には無理があると思われる。</p> <p>また、「旭三訓」と競技力に係る目標設定は、今年度は入学当初の指導が思うようには出来なかったことや大会などの中止もあって目標達成は難しいと思うが、これは已む得ないことである。</p>							
目標の達成状況の評価の適切さ	B	<p>補助資料による説明があり、具体的な伸び率等把握・分析された評価であるため、適切である。</p> <p>3年生の成績については、普通科が2学期以降に学習時間で見ると挽回したものの、2年次までの学習量の不足から、共通テストの結果も前年より少しアップした程度に留まっている。但し5教科受験者が倍増しており、進学に向けての雰囲気づくりは一昨年のレベルに戻ったと評価できる。したがって、結果については期待したい。</p> <p>コロナ禍で、臨時休校や大会中止などが大きく影響した。しかし、不測の事態があっても主体的に学習する姿勢を身につけさせることは重要である。</p>							
目標達成に向けた取組の適切さ	A	<p>「旭三訓」の実践については、毎年レベルの高い目標を立てて取り組まれている。</p> <p>しかし今年度は、年度当初に休校や部活動の自粛等の影響で、新入生に対して思うような指導が出来ず、昨年までのようにはならないのではと危惧されたが、学年・HR・部活動において粘り強く取り組まれてかなり元に戻ってきたと思われる。</p> <p>このことは神辺旭高校が最高に誇れることであり、これからもこの伝統を守ってほしい。</p> <p>また、学力向上に向けて、やはり学習習慣を定着させ、学習時間が増加するよう取り組みを強化することが求められる</p>							
評価結果の分析の適切さ	B	<p>ICTの活用について、先生方によってはかなり苦労された方も多いかと思うが、少しずつ慣れてきていると思われるので、生徒に負けないよう頑張ってもらいたい。</p> <p>生徒の進路決定に向けた学習状況も、特に3年生については昨年に比較すると、学年全体で良いムードになっているのではないかと感じる。</p> <p>「コンピテンシー活用自己評価分析」のグラフ等の補助資料は、分かりやすいものになって来た。</p>							
今後の改善方策の適切さ	B	<p>分掌ごとに「目指したこと」「課題と捉えていること」を分析され明確になった課題についての改善策の策定を行っており適切だと考える。</p> <p>「大学入学共通テストの受験者を増やす」ことは、学習時間を増やすことに繋がるが、そのための進路指導の方針(ルール作り)の見直しと学校全体での意識統一が必要である。そして、このことはまず保護者の理解を得ることが重要である。</p> <p>部活動における休養日の設定は、教員の「働き方改革」の一環であると思うが、生徒にとっても部活動と学習の両立を図るための生活のリズムを考え直す絶好の機会であると思う。</p>							
総合評価	B	<p>教職員が生徒のために頑張っておられることは評価しているが、神辺旭高校には部活動の成果以上に進路面での実績向上が地域の期待であると考えている。しかし現実には、入学してくる生徒に基礎・基本の定着を図り学習上の個別課題を克服させる必要があることから、ICT を利用した様々なアプリケーションの活用が、自分の理解度に応じた学び直しなど、個別学習の有用なツールとなって、基礎学力の定着や学力向上に繋がることを期待する。また、授業の様々な場面での活用が主体的な学びや学びの深化に繋がることを期待する。</p> <p>地元の中学生にとって神辺旭高校は「憧れの高校」であり、兄弟・姉妹の入学者も多い。その憧れを現実のものとする取り組みが必要である。</p> <p>今はその正念場であり、教職員がどんな学校にしたいのか、地域から何を期待されているのかを再確認していただきたい。</p>							